

ともに進む道

代田中・3 小島 瑛人

六月の下旬、中学最後の部活の大会が行われた。緊張や恐怖などのさまざまな感情が僕の心の中で入り乱れていた。だが、そんなことは気にもせず、試合はすぐに終わった。負けたのだ。チームメイトが号泣する姿が見られた。だが、僕には、一つの感情もなかった。僕はひっそり呟いた。

「もう、負けちゃったんだ。」

四月、僕たちは進級して三年生になった。高校受験がある、大切な一年だ。その中でも、僕が特に考えていたのは、野球部員としての最後の年である、ということだ。二年生まで、僕はレギュラーとして多くの試合に出してもらっていた。三年生の先輩が引退してからは、チームをまとめる存在にもなっていた。試合でも、ヒットなどでチームに貢献できるようになっていたのだ。僕だけでなく、チームのメンバーも活躍する姿が多くみられた。そんな中で、僕たちには一つの目標があった。東三大会への出場だ。それを胸に、一生懸命頑張ろうと思えた。

ある日の部活動で、いつも通り集団走をしていた。

「イチ、ソーレ、ニー、ソーレ。」

と、いつもの掛け声で走っていた。それが終わると、キャッチボールを始めた。僕はいつも、弟のようにかわいがっていた、一つ下の後輩とキャッチボールをした。そんな後輩が、僕に話しかけてきた。

「次の大会、絶対ヒット打ってくださいよ。」

と。五月の下旬に大会があり、この大会が終われば、残り二回しか大会はない。そんなことを思い、後輩に対して

「あたりまえだ。」

と、自信満々に言い切った。

「絶対勝とうな。」

と、僕が言うと、

「絶対勝ちましょう。」

と、後輩が言った。

五月、大会の日がやってきた。チームで円陣を組み、キャプテンが

「絶対勝つぞ！」

というと、それに続いて、皆が

「オー！」

と、精いっぱいの声で言った。試合は順調に進み、一回戦は難なく突破することができた。だが、僕はヒットを打つことはできなかった。それに加え、大きな活躍をすることもできなかった。このままの調子だと、二回戦でも同じような結果になってしまうと思い、その日は家で何回もバットを振った。だが、現実は甘くなかった。

僕は、二回戦でもヒットを打つことができなかった。それに加えて、

チームも負けてしまった。

(どうすればいいんだ。)

と考えていたが、結局答えは見つからなかった。大会は、残り二回だ。

(ここで自分の全力を出さない。)と、必死になっていた。

五月中旬、新一年生も入部し、僕やチームメイトも心機一転、頑張ろうとしていた。そんな中、僕に予期せぬアクシデントが起こってしまった。練習中に指をけがしてしまったのだ。自分は大したけがではないと思っていたが、病院で、全治一ヶ月だと聞き、僕は驚いた。けがを治すために、野球はできなくなる。つまり、五月の終わりがある大会には出られないのだ。大きなショックだった。けがをしなれば、もっと練習して、試合でもヒットを打てたかもしれない。

ないのにと思った。だが、どうすることもできない。もう野球をやめたい、とも思った。

数日後、僕は部活動で、自分が次の大会に出られないことを伝えた。(まあ、だれも気にしないか。)と思っていたが、後輩が「けがを治して、夏の大会は絶対勝ちませう。」

と、励ましてくれた。一人だけではなく、たくさんのチームメイトが僕に励ましの言葉をくれた。それを聞いて、僕は一歩ずつでいいから、必ずけがを治して、夏の大会で絶対勝とうと思えた。

一ヶ月が経った。けがも治り、練習も再開できるようになった。だが、夏の大会まで一か月を切っていた。僕は、自分にできる限りのことをやった。もう何かに迷うような時間はない。そう思い、練習に取り組んだ。

時間は一刻も休むことなく進み、夏の大会の日となった。誰もが緊張しているのが、顔を見てわかった。だが、いちばん緊張しているのは、自分だと思った。口や足がぶるぶると震えていたからだ。しかし、緊張していても、過去に戻ることはできない。気持ちを切り替え、試合へ臨んだ。僕は、七番での出場だった。ヒットでなくとも、チームのためになるバッティングをしようと思った。だが、試合が始まると、チームのミスも重なり、相手の流れになっていたのだ。それでも、僕たちは一生懸命を出し、チームを盛り上げた。どれくらいだっただろう。ようやく自分の打席が来た。ベンチから

「瑛人、打てー！」

と、大きな声援が飛んできた。それを力に、僕はバットを思い切り振った。ボールがバットに当たった。全力で走った。だが、アウトだった。その後は、特に攻撃ができぬまま敗れてしまった。あつというまのことで、僕は、何も思うことができなかった。そんな時に、自分の方へ誰かが近づいてきた。いつもキャッチボールをしていた後輩だ。泣きながら僕に

「先輩と、もっと一緒に野球したかったです。」

と言ってきた。そんなことを言われ、僕も泣きそうになった。だが、ぐっと涙をこらえ、僕は

「今までありがとう。」と伝えた。

部活動での本当によい三年間だったか、と聞かれるとわからない。だが、試合で活躍するだけが、本当によいことではない。チームのみんなと部活動に励み、ときに喜び、ときに悲しみ、皆で一つになることが大切なのだとわかった。この考え方を大事にし、さらなる高みへと向かっていきたい。